

108 ジヴェルニーに咲く日本の牡丹 (2022年4月21日)

画家クロード・モネは、ジヴェルニーの自宅の庭に日本風の橋を作り、数多くの睡蓮の絵を描いたことはよく知られています。モネの家と日本とのつながりについては以前にご紹介しました(※)が、今回は牡丹を通じた日本との交流についてお話しします。

中国原産の牡丹は、7、8世紀頃に中国から日本へ持ち込まれました。日本固有の品種も数多く作出され、色鮮やかで大輪の花を咲かせる牡丹は「百花の王」と呼ばれ、長く日本人に愛されてきました。牡丹は、数多くの絵画や焼物の文様として描かれ、文学作品でも語られてきました。牡丹 (Tree Peony) と芍薬 (Herbaceous Peony) は、姿が似ていますが、牡丹は低木で芍薬は草に分類されるという違いがあります。



Porcelaine d'Imari (17^e) 伊万里焼 (17世紀)
ODANO Naotake 小田野直武 (1749-1780)
Sources/出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

日本の浮世絵を蒐集し、日本文化の影響を受けたモネは、日本の美術品を通して牡丹の花の美しさに惹かれていきました。モネは、1883年に日本にいたドイツ系アメリカ人園芸家兼貿易商を通じて牡丹の苗を取り寄せて、自分の庭に植栽して育てました。そして、1887年に絵画「牡丹」というタイトルで、萱の屋根に守られた牡丹(写真右)の絵を描きました。しかし、その後は長い年月が経つ内にモネの庭から牡丹は姿を消してしまいました。そのことを残念に思った前庭園長が、牡丹の花が咲くモネの庭園を復元できないかと考えていたところに、日本一の牡丹の産地である島根県大根島の日本庭園由志園から、牡丹の苗を寄贈するとの申し出がありました。そして、約130年ぶりに日本の牡丹がモネの庭園に植栽され、日仏外交関係樹立160周年で開催されたジャポニスム2018の機会に艶やかな牡丹が咲く庭が蘇り、文字通りに日仏両国の友好記念行事に華を添えました。



パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

2021年12月に、庭園を更に美しく彩るために、再び日本庭園由志園から牡丹の苗が輸送され、庭園に植栽されました。庭師の方々の日々の丹念な手入れのおかげで、苗は順調に成長しています。天候によりますが、ジヴェルニーでは、4月の第四週頃に牡丹の花が見頃となると予想されています。



モネが愛したジヴェルニーの庭で、100年以上の時を経て再び日本とフランスの交流の証となった牡丹の花をご覧ください。ぜひご覧ください。



※牡丹の花の写真は、2018年に撮影されたものです。

(※) 19 ジヴェルニーのモネの家 (2020年12月17日)

<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100127308.pdf>